

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

スポーツのグローバル化にみる<功>と<罪> : 伝統スポーツの存在理由を問う

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2013-07-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 稲垣, 正浩, Inagaki, Masahiro
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1771

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



スポーツのグローバル化にみる「功」と「罪」 ― 伝統スポーツの存在理由を問う ―

稲垣 正浩

1. はじめに

二一世紀もすでに一〇年が経過し、世界はボーダーレスの時代に向かってますます加速し、政治も経済も「世界は一つ」の実現に向けて遮二無二突き進んでいるかにみえる。いわゆる「グローバル化」の進展である。しかし、すでに多くの議論があるように、グローバル化には「功」と「罪」の二つの顔がある。

とりわけ、文化の領域にあつては、グローバル化のもつ「暴力性」が問題視されている。しかも、その影響力は多方面にわたたり、かつその根は深い、と言われている。たとえば、ある特定地域に固有のマージナルで、バナキュラーな伝統文化は、その特定地域の生業形態と密接に結びつきながら伝承されてきた。しかし、地域開発などの名目でヨーロッパの巨大な資本が導入されるやいなや、伝統文化を伝承する基盤が失われ、つぎつぎにその姿を消すという現象が起きている¹⁾。それは、われわれの関心事である伝統スポーツの分野でも同様である。

にもかかわらず、市場経済の荒波をくぐり抜けて、いままなお細々ながら伝承されている伝統スポーツも少なくない。しかしながら、その多くはほとんど形骸化してしまい、その起源を彷彿とさせるような本来の姿を見届けることは不可能な状況を迎えているというのが実情である。日本の伝統スポーツもまた同様である。

そんな趨勢のなかにあつて、日本を代表する伝統スポーツの一つ、大相撲もまた、いま、大きな曲がり角を迎えている。幸いなことに、大相撲の人氣はいまも盛んで、多くの日本国民のみならず、モンゴル国をはじめとするアジアの近隣諸国はもとより、ヨーロッパでも最近では強い関心を寄せていると聞く。現実問題としても、多くの外国人力士が、横綱をはじめ上位にずらりと顔をならべ、日本人力士が片隅に追いやられている、という印象は否めない。大相撲の幕内力士のうち、半分以上を外国人力士が占めるのは時間の問題と断言していいだろう。

こうした大相撲の「グローバル化」や「国際化」の問題が三重に交錯しながら、モンゴル出身横綱朝青龍の引責・引退問題が大きな議論となった。しかし、それもまたやむやむのうちに消え去ろうとしている。そして、大相撲はまた、新たな激動の時期を迎え、さまざまに変化・変容しつつ、つぎの時代に向けてスタートを切った²⁾。

ここでは、「グローバル化」と「伝統スポーツ」という第二回国際セミナーのテーマに即して、日本の大相撲を事例としてとりあげ、その深層にある問題について考えてみることにする。すなわち、こんにちもなお「国技」として温存される伝統スポーツと大相撲が存在する理由について、とりわけ、その始原をめぐる問題に分け入って、考えてみたい。

2. 日本の伝統スポーツとはなにか

2-1. 伝統スポーツという概念について

「伝統」は創られるものである。しかも、つぎつぎに変化・変容するものである。伝統スポーツもまた同様である。にもかかわらず、「伝統」といわれると、いかにも古い時代から固定した様式が伝承されてきたかのようないメージが強いが、必ずしもそうではない。その多くは近代に入ってから、フィクションに構築されたものだ、とさえ言われるほどである。ただ、それぞれの地域や社会に固有の生業形態やそこから生まれる慣習行動を色濃く反映したものであり、マージナルで、バナキュラーなものであるという点だけは確認しておく必要がある。

もう一点は、近代スポーツと伝統スポーツの厳密な境界線は存在しない、ということである。たとえば、日本の柔道はアルファベットで表記される「JUDO」と漢字で表記される「柔道」との間にはなんの違いもない。

しかしながら、グローバル化した「JUDO」の国際大会と、国内で開催される「柔道」の選手権大会では、その内実には明らかに相違がある。さらに、古い様式を伝承している「柔術」は近代スポーツではなく、伝統スポーツに分類されることになる。つまり、ひとくちに「じゅうどう」と呼んでも、それが意味する内容にはかなりの相違がある。そのコンテクストによつて、「じゅうどう」がグローバル化した「JUDO」であったり、近代スポーツとして組織化された日本の「柔道」であったり、あるいはまた、日本の伝統スポーツとしての古い「柔道」であったり、場合によって

は「柔術」を意味することもある。

このように伝統スポーツという用語はきわめて多義的である。まずは、この点を確認しておくことが肝要であろう。それでもなお、基本的には近代スポーツに対する対義語として伝統スポーツという用語が存在することには変わりはない。

2-2. 日本の伝統スポーツ

広く認知されている日本の伝統スポーツとしては、柔道、相撲、剣道、弓道、なぎなた、合気道、空手、日本拳法などが知られている。これらはいずれも武術である。つまり、日本の伝統スポーツの主流は、なんと武術なのである。たとえば、柔道をみれば明らかなように、流派柔術のように近代化を拒否し、むかしながらの流派固有の型や精神を大事にする柔術をめざすものは純粋な伝統スポーツとして行われている。他方、全日本柔道連盟のような全国的な統括団体によって組織され、近代化をはたした柔道は近代スポーツとして競技会が行われている。さらに、オリンピック競技種目として採用され、グローバル化をはたすと「JUDO」となる。³⁾つまり、柔道がその典型的な例なのだが、流派柔術と全日本柔道連盟と国際柔道連盟との三つの組織によって管理運営されているものもある。つまり、柔道には三つの顔があるということになる。日本の伝統スポーツにはこのような特徴がある、ということは注目しておいていいだろう。この柔道と同じように、広義の伝統スポーツは、近代スポーツとして行われるものと伝統スポーツとして行われるものとの二つの顔をもっている。

それらは全国的な統括組織をもつ伝統スポーツということになるが、それとは別に、各地域に個別に伝承されている伝統スポーツもある。たとえば、以下のようなものである。すなわち、競馬（くらべうま）、流鏝馬（やぶさめ）、古武術（多くの流派がある）、力石（ちからいし）、綱引き（祭祀儀礼）、棒術、どろんこ相撲、など。このようにして、さらに、伝統スポーツと呼ばれているものの細部に分け入っていくと、その多くは祭祀儀礼として行われていることがわかってくる。つまり、日本の伝統スポーツのルーツの多くは、祭祀儀礼として行われていた身体技法にゆきつくのである。したがって、その祭祀儀礼が行われていた祝祭とはなにか、その時空間とはなにか、という問いが新たな問題として立ち上がってくる。

日本の伝統スポーツとグローバリゼーションの問題を考える素材としては「相撲」がもっとも適している、と考えられる。したがって、以下には具体的な事例として「相撲」をとりあげ、さらに踏み込んで考えてみることにしよう。

3. 伝統スポーツとしての「相撲」の国際化について考える

3-1. 「相撲」のシニフィエ（指示内容）

こんにちの日本に伝承されている相撲は、大きく分けて四つの顔をもっている。一つは日本相撲協会によって組織されているプロの大相撲である。二つめは、日本相撲連盟によって組織されているアマチュア相撲、三つめは、神社などで行われる祭祀儀礼としての相撲、すなわち奉納相撲、四つめは、遊び・娯楽・余興として行われる相撲である。また、歴史的にみると、古くは弥生時代（前三〇〇年ころ～後三〇〇年ころ）に行われていた農耕儀礼（豊穰儀礼・五穀豊穰・子孫繁栄）としての相撲、奈良朝時代の天皇家の年中行事として行われた節会相撲、武家時代には戦場における武術の一つとして行われた相撲、江戸時代の興行相撲として行われた勧進相撲、明治に入ってからこんにちの日本相撲協会の前身となる東京大角力協会が組織され（一八八九年）大相撲が定期的に開催されるようになった。

以上のように、ひとくちに相撲と言っても、そのシニフィエは歴史的にも、そしてこんにち的にも多岐にわたる。わたしたちはこれらのイメージが渾然一体となったものをひとまとめにして「相撲」と呼んでいる。

3-2. 大相撲の伝統様式について

いわゆる「すもう」「レスリング」系の伝統スポーツは世界の各地に伝承されている、もつともポピュラーなものであると言っていいたいだろう。アジアの各地にも、たとえば、モンゴル相撲、中国少数民族の間に伝承されている民族相撲、朝鮮半島に伝承されている相撲（シルム）、などがある。これらの相撲と日本の大相撲とのもつとも大きな違いは「土俵」の有無である。韓国相撲にも「土俵」はあるが、日本の大相撲の「寄り切り」（相手を土俵の外に押し出す）という技は認められていない。勝敗を決するのはすべて「投げ技」である。

伝統は創造されると言われるように、日本の「土俵」も一六六一年に「創造され」、導入されたものである。こんにちもお伝承されている横綱の「土俵入」もこのときからである。それまでは、「方屋入り」と呼び、天地長久、五穀豊穡を祈る儀式であった。その精神はいまも変わらない。しかし、こんにちの土俵入の伝統様式は長い時間をかけて徐々に構築され、最終的にこんにちの様に固定されたのは比較的新しいとされている。横綱は化粧廻しをつけ、太刀持ちと露払いを従えて、土俵に上がり、四股を踏み、「雲龍型」あるいは「不知火型」と呼ばれる所作を行う。この土俵入全体の進行を取り仕切るのは立行司で、呼び出しも拍子木を打って合図を送る。

また、場所ごとに土俵を新しくするのであるが、そのつど神事としての「土俵祭」が行われ、伝統様式に則った一定の手続を経る。土俵の内径は一五尺(四五四・五センチメートル)、円形をかたどる二〇俵の小俵を周囲に埋める。土中に六分を埋め、四分を地上に出す。そのうち、四俵が徳俵である。

以上のような大相撲を支える伝統様式は全体のほんの一部にすぎず、この他にも親方、相撲部屋、ちゃんこ、茶屋、升席、床山、相撲甚句、やぐら太鼓、触れ太鼓、化粧まわし、まげ、弓取式、しよつきり相撲、相撲文字、番付、など多くの伝統様式がいまも大切に温存されている。この意味でも、日本の伝統スポーツを考える上で、大相撲は格好の素材と言っていだろう。

3-3. 大相撲の「国際化」にともなう必然Ⅱ横綱・朝青龍問題

日本の伝統スポーツである大相撲が、近年モンゴル出身の力士たちの活躍によって、上位の重要な地位を独占されてしまい、日本人力士の影がうすくなってしまっている。以前にも、ハワイ出身の力士が活躍した時代があった。そのもとと前にも外国出身の力士たちが活躍したことがあった。しかし、その数はごくわずかであった。ところが、ハワイ出身力士が大関・横綱になって活躍するところから、大相撲の「国際化」ということがしばしば話題になるようになった。そして、それに続くこんにちのモンゴル出身の力士たちの活躍である。

今場所(二〇一〇年五月)は、横綱・大関合わせて六人のうち、四人ま

でもが外国人によって占められている。幕内力士全体でみても、まもなく半分以上がモンゴル出身力士で占められるだろう、と言われている。それは、ある意味では必然である。なぜなら、日本の若者たちにとって大相撲は、もはや魅力的な世界ではなくなってしまっているからだ。つまり、才能のある力士志望者が圧倒的に少なくなってしまった、ということだ。それに対して、モンゴルからは伝統的なモンゴル相撲でその才能を開花させた若者たちが陸続と日本にやってくる。そして、気づいてみれば、幕内力士の有望な力士のほとんどがモンゴル出身である。その端緒を開いたのが、つい最近まで横綱として大活躍した朝青龍である。

その朝青龍がある不祥事が引き金となって引退に追い込まれてしまった。これは、まさに、事件であった。しかし、その事件は刑事問題にもならず、うやむやのうちに収束してしまった。だから、このうやむやの収束の仕方そのものが、新たな問題となり、大相撲のこんにちに大きな禍根を残すことになった。

不祥事そのものは、きわめて素朴にして単純。横綱朝青龍が酒を飲んで暴力を振るった／振るわなかった、というよくある話。しかも、相手は「酒飲み友達」のひとり。それが横綱の「品格」に触れるとして大騒ぎとなり、その「騒ぎ」が「引退」の引き金となった。この他にも、いわゆる不祥事が重なってはいいた。しかし、かつての日本人横綱の犯した「犯罪」(たとえば、ピストルの密輸、など)に比べれば、「厳重注意」くらいで充分だったはずである。しかし、日本のメディアをはじめとする世論という圧力が、孤軍奮闘のモンゴル出身横綱朝青龍を「引退」に追い込んでしまった。

その背景にあったものは「ゼノフォビア」以外のなものでもない、とわたしは考えている。その根源にあるものは、日本の伝統スポーツが外国人力士によって「乗っ取られてしまった」ことに対する、けして正当化はできない心情的な「うらみ」「つらみ」のねじれた感情の表出である。すなわち、「ゼノフォビア」。

別の言い方をすれば、文化の違いの必然ともいえるべき文化的軋轢が生んだ悲劇。伝統スポーツが「国際化」し、「グローバル化」するときには、必ず通過しなければならないハードルのひとつ。その典型的な事例が、朝青龍問題として噴出した。

3-4. 横綱朝青龍が立ち会うことになった文化的軋轢

結論から言っておけば、モンゴル相撲の伝統と日本の大相撲の伝統との「接触」にともなう文化的軋轢、それを一身に受け止めることになった朝青龍の葛藤、それがこのたびの朝青龍問題のもっとも大きな構造であった。

では、モンゴル相撲の伝統とはなにか。簡単に要約しておけば、以下のようになろうか。モンゴル相撲の最大の特徴は、ナードム祭という祝祭空間のなかで行われる祭祀儀礼であることにある。そこで力士は、祭祀儀礼として行われる「供儀」の主役である。したがって、取り組み前に力士の出自を知らしめる歌が歌われ、力士は舞い踊る。勝てば、勝者を讃える歌が歌われ、ふたたび力士は舞い踊る。そして、敗者は勝者の脇の下をくぐり、服属の儀礼が行われる。しかも、取り組みは一日で終わるトーナメント方式である。負ければそこで終わり。横綱、大関などの地位は、一度獲得すれば、試合の勝ち負けに関係なく死ぬまで保持できる。職業はそれ以外にもっていて、いわゆるプロの力士はいない。だから、ナードム祭のときにのみ「力士」となり、あとはふつうの生活を営んでいる。稽古もトレーニングも、だれにも拘束されない。自分の意志で行われる。ちなみに、朝青龍の父親は大関という地位をもつ力士であり、かつトラックの運転手であった。

こういうモンゴル相撲の伝統を、朝青龍は生まれながらにして空気のように呼吸しながら育った。そして、早くからその才能が見出され、高校生になるときにスカウトされ、日本に相撲留学をした。その期待どおりにめきめきと頭角を現し、高校二年生でプロの力士をめざし、大相撲の高砂部屋に入門。以後は、天空に舞い上がる鷹のように、一気に昇進街道を駆け上がり、横綱の地位を手にする。日本の大相撲の「伝統」に馴染む前に横綱の地位についてしまった。人懐っこい明るい性格と、妥協することの大嫌いな一本気の性格も、一度も挫折することなく、あまりに順調に横綱になってしまった。したがって、つねに「マイ・ペース」を維持した。モンゴル相撲の伝統そのままに。

好事魔多し、という。ここに予期せぬ大きな落とし穴が待ち受けていた。日本の大相撲の伝統と言われる稽古熱心、巡業でのサーブス、横綱の「品格」、などの問題である。朝青龍は横綱になってからも、強い横綱として、そして、一人横綱として土俵の上で頑張った。小さなからだに闘志をみな

ぎらせる気迫の籠もった取り口で、朝青龍人気は沸騰した。連日、満員御礼の垂れ幕が下がり、日本相撲協会は大いに潤った。しかし、その反面で、稽古はマイ・ペース、巡業はさぼる、協会に無届けでモンゴルに帰国、親方の言うことも無視する強い個性、深酒での暴行疑惑、など物議をかもしことも多かった。それでも、場所ごとに優勝を重ね、優勝回数記録を伸ばしていった。朝青龍個人のなかではなんの矛盾もなく、本場所の土俵に全身全霊をそそいだ。

ただ一つ問題だったことは、朝青龍はどこまでもモンゴル相撲の伝統の枠の外にはどうともしなかったことだ。だから、モンゴルの力士としてはなんら問題にもならないことが、たとえば、巡業をさぼってモンゴルに帰国し、サッカーに興じたことが、日本の大相撲の伝統的な考え方や慣習行動からすれば大問題となった。このとき、初めて朝青龍は大きな壁にぶちあたった。おそらく、かれにとっては青天の霹靂。なにが問題になっているのか、まったく理解できなかった。そのために精神的に不安定にならなかった。このとき、おそらく生まれて初めて精神的な葛藤を、自分では理解不能の葛藤を経験したのではなかったか。

その結果、二場所出場停止という日本相撲協会による処分を受け、謹慎することになった。悩みに悩んだ末に、気持ちを切り換え、ふたたび強い横綱となって復活した。朝青龍の休場の間に横綱となったモンゴル出身の白鵬と二人横綱を張り、優勝争いを展開して、朝青龍人気は衰えをみせなかった。メディアによるゼノフォビアとも思いき一方的な「朝青龍バッシング」にも耐え、強い横綱として、その地位を維持した。しかし、最後の優勝を飾った場所中に起きたとされる深酒による暴行疑惑(いまも真相は不明)が引き金となって、朝青龍は「引退」に追い込まれてしまった。根柢があいまいなまま、メディアによる「朝青龍、辞める」の大合唱を前にして、無言のまま(一切の弁明もしないまま)、朝青龍は「引退」を決意した。これが、おそらくは、二度目のカルチャー・ショックだっただろう。なんともいえない不気味な雰囲気を残したまま、後味の悪い「引退劇」を演じなければならなかった朝青龍の心中は察して余りあるものがある。

3-5. 異文化接触による「分割/分有」——「進化」のチャンス

この問題は朝青龍個人の問題ではない。まさに、モンゴル相撲と日本の

大相撲とが「接触」することによって起きた「分割／分有」の問題である。⁴ いうなれば、異文化接触にともなう必然なのである。その文化的軌轍を朝青龍という個人が一手に引き受けなくてはならなかった個人的な葛藤は大変なものだったろう。この教訓をこんごどのように活かしていくのか。大きな課題が残されることとなった。

そこで問題の所在をもう少し掘り下げておこう。

異文化接触は、長い人類史のスパンで考えてみても、つねに繰り返してきた必然であつた。そして、そのつどあるものは消滅し、あるものは新しい文化を生み出し「進化」をとげる。こうしたことを繰り返しながら、こんにちを迎えている。ここにみえてきたようなモンゴル相撲と日本の大相撲のような「接触」はこれまでの歴史をふりかえつてみれば明らかのように、つねに繰り返されてきた異文化接触の問題である。ただ、異なるとすれば、近代という時代を通過し、グローバル化の進展した現在にあって、国民国家の遺習をいまでも色濃く残しつつ、時折、伝統スポーツという名のもとに狭量なナショナリズムが「亡霊」のように思いがけないところで顔をだす、という点にあらう。

二一世紀という時代に踏み込んだこんにちの世界の情勢は、予想をはるかに超える経済原理がつよくはたらく時代となり、ボーダーレスに企業も人も交流し、拡散している。いまや日本も逃れることのできない「ホスト社会」として機能せざるを得ない状況を迎えており、世界中の資本も企業も労働者も受け入れつつある。日本の大相撲も、この「ホスト社会」の反映の一つで、固有の相撲文化をもつモンゴル出身者を大量に受け入れた。いうなれば、優秀な「労働者」をスカウティングしたにすぎない。しかし、気づいてみたら、大相撲の頂点に立つ横綱が日本人力士ではなく、モンゴル出身者が占められ、この勢いは当分の間、止めようがない事態にいたっている。いな、むしろ、モンゴル出身の力士なくしては、もはや、日本の大相撲は成り立たない事態にいたっている。このことをはつきりと自覚すべきではないか、とわたしは考える。

それどころか、逆に、いまこそ日本の大相撲が「進化」する絶好のチャンスだ、と考える。伝統はつねに創られるものである。モンゴル相撲という歴史も伝統もある固有の相撲文化と「接触」することによって、さらに魅力にとんだ相撲文化が誕生する可能性はきわめて「大」である。もともと

とモンゴロイドという生物学的にはきわめて近い類縁関係にある人びとの「接触」である。力士の身体もまた「創られる」ものだとなれば、こうした異なる相撲文化の「接触」をとおして、いままた、歴史的・文化的に新たな力士の身体が「創造」されようとしている、というべきであろう。

力士の身体が新たに「創造」されれば、当然のことながら、その身体の登場とともに相撲内容もまた新たに「創造」されることになる。それは日本の大相撲にとつては、まったく新たな時代のはじまりを意味すると言つていいだろう。

さらにもう一点だけ、ここで触れておけば、「土俵」をもつ日本の大相撲と「土俵」をもたないモンゴル相撲との出会いによって、なにが新たに生まれようとしているのか、という点である。日本の「土俵」は、女性を徹底して排除する「聖域」と考えられている。つまり、神の棲む神聖なる聖域（あるいは、神の降りてくる依代）なのである。だから、大相撲はその聖域のまつただ中でくりひろげられる神事儀礼そのものとなる。いうなれば、世俗の空間のなかに、四本の柱（いまは「房」）で区切られた「閉じた空間」を構成し、そこで営まれる「神事儀礼」そのものののだ。その意味では、典型的な前近代的な伝統スポーツと呼ぶにふさわしい。それと同じように、「土俵」が大自然の草原そのものであるモンゴル相撲もまた「開かれた聖域」のなかでくりひろげられる神事儀礼である。言ってしまうと、日本的大相撲と「接触」することによって、新たな「分割／分有」のチャンスを迎えているのである。その一端はモンゴルでの日本の大相撲人氣にみえてとることができる。

その意味でも、朝青龍の「存在」をないがしろにしてはならない。モンゴル相撲にとつても、そして、日本の大相撲にとつても、その「存在」の大きさは計り知れないものがある。たとえば、朝青龍の相撲内容は日本の相撲史上に燦然と輝く、新たな歴史の扉を開くものであつた。土俵の上でみせたかれの魅力的な相撲は、多くの日本人のこころを捉え、感動を呼ぶものであつたし、絶大なる人気を博したのも故無しとしない。それゆえに、朝青龍の相撲は長く人びとの記憶から消えることはないだろう。

4. 伝統スポーツとしての「相撲」の存在理由を考える

日本人は相撲好きである、と言われる。なぜか。相撲をとおしてむかしから多くの物語が誕生し、多くの人びとに語り継がれてきた経緯がある。だから、日本人は相撲に関する多くの情報を共有している。たとえば、日本人であれば、野見宿禰と当麻蹴速の相撲の話を知らない人はいない。しかも、この話が『日本書紀』（七二〇年）に記録された最古の相撲の物語であるということも知っている。なかでも、天皇が主催した節会相撲が年中行事（毎年七月七日）となり、広く知られるところとなった。以後、相撲は、武器をもたない素手で闘う格闘技の原型として、多くの人びとの遊び・娯楽としても親しまれてきた。室町時代の末期にはプロの力士も誕生し、土俵も考案されて、芸能化の道を歩みはじめた。江戸時代には武士階級によって擁護され、多くの藩が力士を抱え（養成し）、その力技を競い合った。とりわけ、元禄時代（一六八八―一七〇四）以降には勸進相撲が人気を呼び、谷風、小野川、雷電などの名力士を生んだ。明治時代には、相撲を統括する組織がつくられ（日本相撲協会の前身）、競技としてのルールを整備した。一九〇九年には相撲常設館としての国技館の完成を機に、相撲は日本の国技としての地位を確保する。以後、それぞれの時代にヒーローが誕生し、相撲人気はこんにちにいたるまで衰えることはなかった。以上が多くの日本人に共有された相撲に関する物語の概略である。

しかし、これだけでは日本人の相撲好きを説明したことにはならないだろう。では、なぜ、相撲が日本人のこころをくすぐるのか、なぜ、日本人のこころを捉えて離さないのか。以下には、相撲の核心にあるものはないかを考えてみたいとおもう。

4-1. 力びと（力士）とはいかなる存在だったのか

日本の大相撲の力士たちの仕事は、ただ土俵の上で相撲をとるだけではない。土俵の外にも仕事がある。たとえば、地方巡業などでは、その地方の名士たちや子どもたちとの交流がある。地方の名士たちの宴会や結婚式などにスペシャル・ゲストとして招かれ、正装して出席し、その会に華を添える。相撲甚句の一つも歌って、ご祝儀をいただく。子どもたちとは、ちびっこ相撲のお相手をしたり、生まれて間のない赤ん坊を抱いたりする。こちらは力士のからだに触れることによって、力士のからだに宿るとされ

る「霊力」をもらい受ける。

江戸時代には、よく起きた火事などの焼け跡に立ち、人びとを激励したり、重いものを運んだりして後片付けを手伝ったりしている。さらに火事の被災者を激励・救済したり、寺社を再建するための勸進相撲を行ったりしている。また、家を新築するときの地鎮祭や上棟式などにも招かれ、その場に立つことによって、あるいはその場で「四股」を踏むことによって地霊を鎮め、家の魔除けの役割を果たす。

力士は、もともと「力びと」とも呼ばれ、人並みはずれた力もちを意味していた。さらに、並外れてからだが大きく、異形の人も「力びと」として、周囲からは畏敬の念をもつて迎えられた。この人々には、ふつうの人とは違う体力はもとより、神から授かった特別の「霊力」も賦与されていると考えられていた。つまり、ふつうの人とは違う世界に存在する人、すなわち人間と神の「仲立ち」をする人、というイメージが人びとの間に共有されていた。

江戸時代の錦絵などには、一人の力士が一度に七俵の米俵（四二〇キログラム）を持ち運ぶ姿が描かれている。なかには、九俵（五四〇キログラム）を運んだという話もある。つまり、力士にかぎらず、こういう力持ちであるということは優れた労働力の証でもあり、同時に、戦う人としても抜群の能力をもつ者として、周囲から尊敬された。いまでも、地方の神社に行くときさまざまだきさの「力石」（ちからいし）が置いてあって、祭礼の折などには、その石を持ち上げる儀礼が行われている。そのむかしは、農村の青年男子の通過儀礼の一つとされ、米俵一俵（六〇キログラム）を一人で担ぎ上げ、持ち運ぶことができるようになって、はじめて「一人前」の農民として認められたという。ここを通過しないことには「嫁取り」もできなかったという。

さきにも触れたように、天皇が「相撲節」（すまいのせち）を主宰して、日本全国から「力自慢」を集めて相撲をとらせたのも、天皇としての権力や統治能力を知らしめるための重要な宮中の年中行事の一つであった。つまり、毎年、もつと優れた「力びと」を選抜して、宮中警護に当たらせたり、あるいは、どの地方にどのような「力びと」がいるか、つねに確認・掌握するための文化装置の一つであったのだ。

佛教寺院の山門には、二体の阿吽型の金剛力士が安置され、人びとはこ

の間を通じて境内に入り、本尊さまを参拝する。金剛力士は寺院の本尊の護衛を勤める人で、足下には仏の教えに従わない人のシンボルである邪鬼を踏みつけて立っている。この金剛力士像の由来を尋ねていくと、インドのお釈迦さまを守る人にゆきつく。さらには、もともと古い土着信仰にまでいたりつく。すなわち、聖なる存在と人間との仲立ちをする人、それが金剛力士の原イメージとなっている。

こうしたイメージが日本人のこころの奥底に、そこはかとなく伝承されているということは注目しておいていいだろう。

4-2. 神事儀礼としての「相撲」と「供犠」の関係

神事儀礼としての相撲はいまでも各地に伝承されている。実際に相撲をとるものから、相撲の所作だけを奉納するものまで、各種さまざまである。大山祇（おおやまずみ）神社に伝わる「ひとり相撲」は神様を相手にとるものであるし、赤ん坊どうしの対戦である「泣き相撲」もあれば、田んぼのなかで行われる「どろんこ相撲」もある。しかし、これらはかなり形骸化していて、その根源にあるもの、あるいは始原にかかわる原イメージはほとんど忘れ去られてしまっている。だから、いまでは、神社の祭礼の場できわめて平和裡に、余興的に執り行われている。

しかし、こんにち知ることのできる範囲（文書資料や映像資料などで確認できるという意味）で相撲の始原を探っていくと、相撲はほとんど「決闘」であることがわかる。さきの日本の野見宿禰と当麻蹴速の相撲も決闘であつたし、国譲り神話のなかに登場する相撲もまた決闘である。これらの記述よりもっと古いギリシア神話のなかに登場する「すもう」（レスリング）も、その多くは決闘である。⁷

さらに古くは、墳墓の内側の壁画のなかに「すもう」（レスリング）が描かれている（エジプト、中国 など）。そこから類推されることは、広義の「すもう」は人間の「生き死に」にかかわる儀礼であり、そのための身体技法ではなかったかということ、つまり、葬送儀礼との深い結びつきがあつたのではないかと考えられていること、である。日本の野見宿禰もまた葬送儀礼に携わる一族であつた。天皇の死に際して行われていた「人身供犠」（生き埋め）の代わりに「埴輪」を提唱したのも野見宿禰であつた。秦の始皇帝の墳墓に埋められた兵馬俑（へいまよう）の大軍団もまた

「生き埋め」の代替物（埴輪）であつたと考えられている。しかし、死者の霊を弔うことと相撲との関係は、いま一つ不鮮明ではあるが、ここにもなにか忘れ去られた記憶（隠された因果関係）があつたのではないかと類推される。

メキシコのアステカ族の間で行われていた「供犠」（生きた人間の心臓を神に捧げる＝太陽の運行を元気づけるため）を手がかりにして、ジョルジュ・バタイユが行つた考察がここで強く想起される。アステカ族は生きた人間の心臓を少しでも多く確保するために、戦争を繰り返し、可能なかぎり多くの捕虜を確保することに全力を傾けたという。

そして、その背景にはバタイユの「消尽」という考え方があつた。つまり、自然界のあらゆるものの存在は、ただひたすら「消尽」あるのみである、とバタイユは考えていた。そのもつともシンボリックな存在が太陽である、と。すなわち太陽はくる日もくる日も無条件に、しかも無目的に大量のエネルギーを「消尽」しつづける存在である、と。

人間もまた、動物性（＝内在性）を生きていたヒトの時代には、ただひたすら「消尽」するだけの存在であつた。しかし、原初の人間は自然のままの動物性の世界から（横滑り）してしまい、人間性の世界に移動しはじめた。こうして人間は自然を対象化する存在となり、やがて自然を支配する存在となる。そして、動物も植物も人間の思うままに支配し、ついには、自分自身の存在をも支配することになる。

こうして、原初の人間は、自然界のあらゆるものの存在を人間の役に立つ「有用性」という観点から理解するようになる。その結果、内在性を生きた自然存在であつたものを、つぎつぎに人間の都合のいいように加工し、飼育し、栽培することになる。つまり、人間の意のままになる「事物」（シヨーズ）と化してしまつた。

しかし、その過程をとおして原初の人間は、同時に、自然界の内在性を生きた「聖なるもの」を否定しているみずからの行為に対して、贖罪の意識が目覚める。そうなると、そのギャップを埋め合わせるための文化装置が必要となってくる。それが「供犠」ではなかったか、とバタイユは考える。すなわち、自然界（聖なるもの）から離脱して事物（世俗なるもの）と化してしまつた「ものたち」（動物、植物、鉱物、人間）をもう一度、自然界に送り返すための儀礼として「供犠」が行われたのだ、と。

4-3. 野生への回帰願望と相撲の関係

ジョルジュ・バタイユの議論によれば、人間は自然界の内在性から離脱し、みずからの環境世界 (Umgang) を「有用性」の原理にしたがって改変し (Ⅱ文化)、自然の法則よりも人間の理性に「信」を置き、人間にとって役に立つものを「事物」と化す道を選んだ。その結果、人間の内的な自然性 (たとえば、本能) をも理性の力によって事物化してしまい、「有用性」 (数量的効率主義) の奴隷と化し、いつのまにやら魂のない脱け殻 (Ⅱ現代人) となってしまう、という。だから、もう一度、自然界の内在性から離脱するところまで立ち返って、人間としてあるべき姿を見直すべきだ、と提唱する。すなわち、バタイユが「内的体験」、「エクスタージ」、「非知」、「消尽」、「エロティシズム」、「呪われた部分」、「有用性の限界」などといった概念をもちいて語りつづけたことがらの根源にある考え方がこれである。

こうしたバタイユの主張を手がかりに、その思考のヴェクトルを同じくするフランス現代思想の系譜に連なる人びとの思想や、¹⁰ 日本の仏教思想¹¹ や神道の考え方 (自然との折り合いのつけ方)、¹² あるいは文化人類学の研究成果、¹³ そして禅の思想を西洋の哲学のことばで語り直そうとした西田幾多郎、¹⁴ さらに老荘思想、¹⁵ などをヒントにして、ここで取り上げている伝統スポーツとしての大相撲を考えてみると、また、あらたな知の地平が開かれてくるようにおもう。

鬚を結い、まわし一つの裸で土俵に上がり、全身全霊を傾けてからだごとぶつかりあい、激情を剥き出しにして勝負にでる力士たちの姿をとおして、わたしたちはそこになにを見、なにを感じとっているのだろうか。大相撲のなにに感動し、なにをここに刻み、なにを記憶としてとどめるのだろうか。わたしたちは、たとえば、朝青龍の相撲をとおして、なにに共振し、なにに共鳴していたのだろうか。それは、今風の勝利至上主義に絡め捕られるような「勝った」「負けた」の世界から大きくはみ出したところにある、あるなにかである、とわたしは考えている。それは、たとえば、仕切り直しをするたびに紅潮してくる朝青龍のからだであり、最後の塩をとりにもどるときの鬼の形相となる姿であり (このときには「歩き方」までが変化する)、氣迫を籠めて利き手の左手でまわしを思いっきりつよく「パーン」と叩く所作であり、ギラギラと燃えたぎるような闘魂で

あり、眼光の鋭さであろう。それは、もはや、この世の人の姿ではない。そして、立ち上がってからは、理性などというものはたらく隙もあらばこそ、からだそのものが自由自在に躍動し、そこからくりだされる切れ味鋭い技の応酬に、多くの人がこのころは吸いよせられていく。

そのときのわたしのからだは、もはや、朝青龍のからだと一体化しており、座ったままでもいながら、全身の筋肉が同じように反応している。相撲が長くなれば、同じように息が上がっている。わたしのからだはひたすら「有用性」とは無縁の「消尽」をつづける。まさに「非知」のレベルに降りていって、全身全霊で「エクスタージ」している。そして、ことばの正しい意味での「エロティシズム」に酔いしれている。剥き出しの「生」を「じか」に感じとりながら・・・。

それは長い相撲の歴史過程をとおして力士のからだのなかに蓄積されてきた超人的な「力強さ」や「靈力」とがなまぜになつた「氣迫」や「躍動感」が、いま、朝青龍のからだをとおして表出しており、それにわたしのからだは反応している、とでもいえないのだろうか。別の言い方をすれば、相撲の「アルケー」 (始原) が、ある瞬間に、突如として噴出してくる、その現場に立ち会っている、その感動ということになるのか。わたしたちは、遠いむかしに置き去りにしてきた「からだのアルケー」を、朝青龍のからだをとおして可視化し、それに「触れる」ことによって「分割／分有」し、共振・共鳴している、というべきか。それは、まるでわたしのなかにある内なる野生への「回帰願望」を挑発しているようにもみえる。

4-4. 人間にとって「スポーツ」とはなにか

—— 伝統スポーツの存在理由を問う

伝統スポーツとしての大相撲の存在理由について考えているうちに、いつのまにやら、人間にとって「スポーツとはなにか」という根源的な問いにゆきついてしまった。つまり、伝統スポーツの存在理由について考えるということは、とどのつまりは、伝統スポーツの始原を探るところにゆきつく。人間はなぜ「スポーツ」という文化を必要としたのか。この点を明らかにしないかぎりには、二一世紀の世界 (現代社会) を生きているわれわれにとって「伝統スポーツとはなにか」「その存在理由はなにか」という問いに応答したことにはならないだろう。

もう一度、問い直そう。人間にとって「スポーツ」とはなにか、と。そして、なぜ、人間は「スポーツ」という文化を必要としたのか、と。

さきほど、わたしは「からだのアルケー」を朝青龍のからだをとおして可視化し、それに「触れる」ことによって共振・共鳴しているのではないかと述べた。では「からだのアルケー」とはなにか。議論をわかりやすくするために、とりあえず「からだのアルケー」とは「ヒトのからだ」、すなわち、内性を生きた「からだの始原」としておこう。それをもう少し具体化するとどうなるのか。

わたしの現段階での仮説は以下のとおりである。

ヒトが人間になる、このときに、ヒトのなかになにが起きたのか。ヒトから人間へと「ジャンプ」(バタイユは「横滑り」という)するときの引き金となったものはなにか。この問いに対して、さきほど述べたようにジョルジュ・バタイユはじつに魅力的な仮説を提示してくれている。¹⁶

動物の世界にあつては、ヒトは「水の中に水があるように存在」していた。つまり、世界の内在性に／を生きていた。そこでは自他の区別はない。もちろん、自己も存在しない。ただ、賦与されたいのちを、そのいのちの命ずるがままに生きていた。そしてそのいのちを維持するためには、他者のいのちを食し、食するためには文字どおり「命懸け」で闘いもした。しかし、ときには他者(より強い動物)に食されることもあっただろう。そして、死とともにそのいのちもまた自然界に回帰していった。これが内性を生きたことの実態であろう。

ところが、その内性を生きたヒトのなかから、その内在性の(外)に飛び出してしまふ者が現れる。つまり、ヒトをとりまく環境世界(Umgebung)を他者として意識する、素朴な「理性」をもった「ヒト」が現れる。すなわち、原初の人間の出現である。この原初の人間は、環境世界である他者のある特定のものを「対象」(オブジェ)としてとらえ(たとえば、名づけ)、やがて「有用性」の判断のもとに「事物」(シヨーズ)(たとえば、道具)にしていく。こうして、原初の人間は「ことば」を生み出し、「道具」を工夫し、「死」を弔い、環境世界である自然を加工する「文化」の領域に踏み込んでいく。こうして、原初の人間は徐々に内在性の世界から外在性の世界へと比重を移していく。このとき主役をはたしたものが原初の「理性」である。この「理性」は、環境世界である自然から

の要請を受けて、「なぜ?」という問いを発しながら、その答え(理由、根拠)を見つけて出している。

しかし、この「理性」は、やがて大きな壁に突き当たる。人間は、動物や植物を家畜化したり、栽培植物にすることによって、つぎつぎに「対象」(オブジェ)を「事物」(シヨーズ)へと切り換えることに成功する。しかし、その一方で、世界の内在性のうちに存在していたものを、人間の世界である外在性に、人間の手によって引つ張り出してしまふことに對する畏れの觀念が芽生えることになる。この畏れの觀念によって、人間は世界の内在性のなかに「聖なるもの」を発見する。すなわち、自然(世界の内在性)を否定して、その(外)(世界の外在性)にとびだしたものの、そこに不安を感じてしまふ。その不安を解消して、安心立命するために(外)を「俗なるもの」として否定し、内在性のなかに「聖なるもの」を見出すという次第である。すなわち、「否定の否定」である。その上で、この「聖なるもの」(自然、野生、内在性)と人間(俗なるもの)＝「事物」との「折り合い」のつけ方に思い悩むことになる。

いささか話は飛躍するが、この難題に対して、これをクリアするための「奇手」を編み出した人間がいた。それは、事物化した動物や植物をも、一度、「聖なる世界」(自然界)に送り返すことによって、一時的に、みずから生み出した葛藤を回避するという方法である。それが「供犠」ではなかったか。しかし、この「供犠」を行うには「理性」のコントロールのもとでは不可能である。そこでさらに工夫され、編み出されたものが「理性」の(外)にはみだすための文化装置、すなわち「祝祭」という時空間の設定である。これは恐るべき文化装置の発見であったといふべきであろう。

この「祝祭」という時空間の設定によって、人間は「理性」の(外)に意図的に飛び出し、人間になる以前の、内在性に生きる「ヒト」としての疑似体験をすることを可能にしたのである。この「供犠」をとまう「祝祭」こそ、原初の人間から「ヒト」に回帰するための、きわめて重要な文化装置として機能したのである。こうして、まずは、ヒトの「からだのアルケー」を一時的に取り戻し、そこに、さらに人間の「からだの記憶」をあらたに折り込んでいく。その現場は、まさに「理性」の(外)、すなわち、「酒池肉林」にも等しい乱痴気騒ぎそのものとなった。そこでは、あ

らゆる秩序が解き放たれ、からだも「自然」のなりゆきのままに開かれ、人びとはまさに「エクスタイズ」の世界へと突入していく。

人びとは歌い踊り、驚異的なパフォーマンスを繰り広げ、やんややんやの拍手喝采を浴びせる。この「祝祭」の時空間こそ「消尽」そのものであり、「理性」の要請する「有用性」からほど遠い存在となる。そして、ここそが「スポーツ的なもの」の始原の「場」ではなかったか、とわたしは考える。そして、古代オリンピックアの祭典競技もまた、このような「場」から誕生したものではなかったか、と。

このあたりで、ひとまず、結論を出しておこう。人間にとつての原初の「スポーツ」は、以上のような自然（聖なるもの）への回帰願望が引き金となって誕生したものではなかったか、と。このときの「からだの記憶」が「からだのアルケー」となつて伝承されるもの、それが伝統スポーツの本質ではないか、とわたしは考える。

5. スポーツのグローバリゼーションにみる〈功〉と〈罪〉

伝統スポーツの本質を、このように考えたとき、「スポーツのグローバリゼーション」というわれわれのこの国際セミナーの課題が、また、別の輝きをもつて再登場することになる。

すなわち、伝統スポーツとしての日本の大相撲が直面している問題は、単なる伝統の継承・発展などという単純なものではなく、これまでに経験したことのないまったく新たな局面を迎えているということが明らかにまつてくる。それは、いわゆる伝統スポーツの「近代化」の問題でもなく、また、単なる「グローバリゼーション」の問題でもない。あえて言うとしたら、日本国内にかぎらず、地球上のすべての伝統スポーツの「本質」そのものが問われている、ということだ。にもかかわらず、伝統スポーツの本質論をどこかに置き忘れたまま、当面の、言つてしまえば、きわめて近視眼的で表層的な問題である「国際化」によつて表出する偏狭なナショナルイズムの問題に摩り替えられている現状にこそ、大きな問題があるというべきであらう。

このことをしっかりと念頭におきながら、「グローバリゼーション」の問題のうち、見過ごしてはならない重要なポイントについて、以下に指摘しておきたい。

少しばかり距離をおいて冷静に考えてみると、いま日本の大相撲が立ち合っている「国際化」の問題は、やがて否応なく「グローバル化」するための重要な前段階であるのかもしれない。なぜなら、横綱の地位をはじめ、幕内力士の半分以上が外国出身の力士によつて占められることになれば（その日はそんなに遠くない）、もはや、日本の「国技」とか、横綱の品格、などという議論も意味をなさなくなるであらう。日本というある特定地域の固有の「伝統」文化として育まれてきた大相撲が、初めて迎えた大きな転換期の現象として、まずは冷静に受け止めるべきであらう。

スポーツが「グローバル化」するときには、大相撲の例はいささか特殊であるとはいえ、大なり小なり、それぞれの国や社会の「伝統」との葛藤が起こるものである。その時点で問題になることは、その「伝統」を放棄して「グローバル化」を目指すのか、あるいは、「伝統」を固持して「グローバル化」に背を向けるのか、あるいはまた、その折衷案を選択するのか、これらのいずれを選択するかということであらう。問題は、このとき、文化的、歴史的、経済的、政治的にどのような「力学」がはたらくのか、その結果、いかなる利害得失が現象するのか、そして、さらには伝統スポーツの本質がどのように考えられるのか、ということであらう。それに対して、だが、どのような視点に立つて「判定」をくだすのか、ということが重要な鍵となつてくる。

また、「4. 伝統スポーツとしての大相撲の存在理由を考える」のところで考察したように、伝統スポーツについて考えること、そして、その存在理由を問うということは、そんなに単純なことではない。この問いは、とどのつまりは「人間とはなにか」「どのようにして人間になったのか」、そして、「人間でありつづけるとはどういうことなのか」という根源的、かつ普遍的な問いにゆきつく。そして、人間の「始原」とスポーツ的なものの「始原」とは分かちがたく固く結びついている、ということをしつかりと念頭に置くことが不可欠となる。しかも、このときからこんにちに至るまで、長い時間をかけて徐々に蓄積されてきた、きわめてパナキユラーな（土俗的・土着的な）「からだのアルケー」が伝統スポーツをとおりして、どのように継承されてきたのか、あるいはまた、どのように形骸化してきたのか、という視点を見過ごしてはならないであらう。

他方、スポーツのグローバリゼーションは、一地域の土着性・土俗性を

排除し（伝統を切り捨て）、無色透明化することによって地球上のすべての人びとが、同じスポーツを「共有」することができると、という大きなメリットをもつ。しかし、さきにも確認したように、グローバルゼーションの背景には複雑で微妙な問題が潜んでいる。かつて、伝統スポーツに関する国際会議が行われた席で、セネガル代表が報告した事例がわたしの脳裏に深く刻み込まれていて忘れることができない。それは、「ヨーロッパ資本の進出によってセネガルの生業形態が根底から変化してしまった。伝統スポーツはむかしから営々と築いてきた生業形態と深く結びつきながら継承されてきたものである。その根幹が突き崩されてしまえば、もはや、伝統スポーツの意味はなくなってしまう。もし、どうしても伝統スポーツを温存（保存）しようというのであれば、まずは、それを支える生業形態を温存させることが先決である。」¹⁸ というものであった。この会議で、唯一、アメリカ代表を震撼させる発言であった、とわたしは受け止めた。

ここで注意を喚起しておきたいことは以下のとおりである。グローバルゼーションは、それぞれの国や地域の「内圧」の高まりという必然性を背景にして進展させるべきことがらであること、つまり、どんなことがあっても文明先進国からの「外圧」によって左右されるべきことがらではないということ、である。しかも、ここでいう「外圧」の多くは国際資本と呼ばれる文明先進国による経済的な圧力である。そして、その多くは「外圧」を受ける人びとの長年の生業形態を根底から突き崩し、生活のベースを破壊してしまうという恐るべき「暴力」を秘めている。当然のことながら、人びとの意識も根底から変化してしまう。だとすれば、そこには伝統スポーツを支える根拠はなにもなくなってしまう。経済優先のグローバルゼーションが秘める恐るべき「文化」破壊という「暴力性」を、わたしたちは忘れてはならない。

このように考えてくると、伝統スポーツの存在理由のもう一つの側面が浮かび上がってくる。すなわち、人間が人間として生きることの根源的な意味を問い続けるといふ、大きなミッシンが伝統スポーツを考えるとこの営みには課されている、ということ。シモーヌ・ヴェイユのことばを借りれば「人間の魂の生にかかわる欲求」という「根」を、いかにして温存させるか、これが「人間」として生きる上での最小限の「義務」であり、「恩寵」ではないか、という。「人間の魂の生にかかわる欲求」について、

ここで詳細に論ずるいとまはないが、たとえば、「飢えた人が目の前にいたら、まずは食べ物を施すこと」、これが人間としての無条件の、そして、絶対的な「義務」である、とヴェイユは考える。ここが、人間を考え、社会や国家や経済や政治を考える「起点」である、と。¹⁹ 伝統スポーツの存在理由もまた「人間の魂の生にかかわる欲求」に「根」をもっているからだ、とわたしも考える。

スポーツにみるグローバルゼーションの〈功〉と〈罪〉を考えるためには、もつと多様な視点からの議論が必要であることは論をまたない。しかし、最小限クリアすべき重要なポイント以上に尽きる、とわたしは考える。だから、ひとまず、ここまででこの論考はとどめておくこととする。

6. おわりに

伝統スポーツの存在理由を問うことは「スポーツ」とはなにかを問うことだ。「スポーツ」とはなにかを問うことは「人間」とはなにかを問うことだ。なぜなら、伝統スポーツのルーツをたどっていくと「ヒトが人間になる」、そのプロセスと分かちがたく結びついているからだ。その意味では、スポーツのグローバルゼーションは、スポーツの始原からもつとも遠いところに位置づく。しかも、伝統スポーツが「魂の生にかかわる欲求」に依拠しているとすれば、グローバル化するスポーツはきわめて表層的な「欲望」に絡め捕られている、と言わねばならぬ。

いま、わたしたちはグローバルゼーションという人類が初めて経験する大きな波に直面し、否応なく、日夜その波にさらされている。その大転換のまっただなかにあつて、もつとも大事な「人間である」ことを見失いつつある。だからこそ、わたしたちは、いま一度、人間としての始原に立ち返り、ゼロ（〇）からの出直しが必要なのだ。その意味で、伝統スポーツを考える営みは、必然的に原初の人間に立ち返って、ものごとの成り立ちを「原点」から考え直す絶好のチャンスでもある。

この論考の柱に、日本の大相撲を据えたのは、理由があつてのことである。つまり、広義の格闘技は、いうまでもなく生物としての生存闘争（*Daseinskampf*）にルーツがあるからだ。そして、生物としてのヒトが文化をもつ人間になるとき、「人間の魂の生にかかわる欲求」の問題が立ち上がった、とわたしは考える。しかし、こんにちのわたしたちの多くは、

このことを遠い過去のこととして忘れてしまっている。また、目先の利害得失に眼を奪われ、考えようとしめない。バタイユ的な表現を借りれば、「呪われた部分」に蓋をし、ひたすら「有用性」のみを追求することに汲々としているかのようにみえる。その意味でも、わたしたちは「伝統スポーツ」をひとつの手がかりにして、原初の人間と「スポーツ的なもの」の始原との分かちがたい関係性に光をあてることが不可欠となる。わけでも、スポーツ史やスポーツ哲学やスポーツ文化論にたずさわる人たちにとっては必須の課題であろう。だから、あえて、みずからの反省もふくめて、伝統スポーツの存在理由を問う、というテーマの柱に日本の伝統スポーツを代表する大相撲を据え、この一点に議論を集中させることにした。

わたしたちは、いま一度、「自然」に立脚した「理性」を取り戻し、原初の人間からこんにちに至るまでの足跡を再確認しなければならぬところに立っている。それが、二一世紀を生きる「人間」としてのミニマムな「義務」でもあるだろう。伝統スポーツはそのための絶好の素材を提供してくれている。伝統スポーツの存在理由を問うことこそが、スポーツにみるグローバリゼーションの〈功〉と〈罪〉を見極めるキーであると考え、あえて以上のようないささか過激な論を展開してみた。大方の忌憚のないご意見をいただければ幸いである。

〔付記〕

蛇足ながら、以上の論考に関連して、バスクの伝統スポーツにあつては、いわゆる格闘技文化はどのような考えられているのか、という点についての応答が得られることを期待したい。管見ながら、格闘技文化をもたないバスクの伝統スポーツとはなにか、その事実が意味するものはなにか、という大きな研究仮説がわたしのなかにはある。たとえば、ペロタ競技は、たんなる球戯(球技)とは言えないだろう。わたしの眼には、どうみても格闘技そのもの、として映る。石の担ぎ上げ競技にしても、それをこんにちまで伝承してきた熱情は、たんなる力自慢だけではないだろう。ここには、日本の大相撲に通底するなにかを感じないわけにはいかない。また、バスクに固有の民族舞踊のなかにも多くの格闘技的な要素が埋め込まれているようにおもふ。なぜ、バスクでは格闘技文化が姿を消してしまったのか。なにゆえに、このような事態にいたっているのか。過去の歴史過程の

なかで、いわゆる格闘技が弾圧・排除された時代があったのだろうか。このように考える背景には、日本の沖繩の問題がある。沖繩には、いわゆる「武器」をもつて闘う格闘技は伝承されていない。その代わりに素手で闘う「空手」と「沖繩相撲」が伝承されている。しかも、伝統的な「琉球舞踊」のなかには多くの武術の技が埋め込まれており、「武と舞」は同根であるという考え方がいまも生きている。そして、沖繩には、明らかに「武器」を取り上げられた歴史過程がある。このような問題意識がわたしの研究の奥底にある。その上で「伝統スポーツの存在理由を問う」という論考を提示した次第である。活発な議論が展開するところから期待するものである。

注および主な参考文献

- 1 西谷修・中山智香子編『グローバル化と奈落の夢』、東京外国語大学大学院二一世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」研究叢書、二〇〇六年ほか。
- 2 二〇一〇年五月現在。
- 3 たとえば、剣道、空手、なぎなた、など。
- 4 ジャン・リユック・ナンシー著、西谷修・安原伸一郎訳『無為の共同体―哲学を問ひ直す分有の思考』、以文社、二〇〇一年。ジャン・リユック・ナンシー著、西谷修訳『侵入者―いま(生命)はどこに?』、以文社、二〇〇〇年、ほか。
- 5 高橋哲哉著『デリダー脱構築』、講談社、二〇〇三年。ジャック・デリダ、サイモン・クリッチリーほか著『脱構築とプラグマティズム―来るべき民主主義』、法政大学出版局、二〇〇二年。ポール・バットン、テリー・スミス、ジャック・デリダ著『デリダ、脱構築を語る―シドニー・セミナーの記録』、岩波書店、二〇〇五年、ほか。
- 6 『古事記』のなかに登場するタケミナカタとタケミカズチの決闘相撲。国を譲るかどうかが相撲で決着をつけることになり、この二人が相撲をとる。タケミカズチの勢力が圧倒的だったためにタケミナカタは途中で逃げ出す。諏訪まで逃げてきたところでタケミカズチに捉えられる。タケミナカタは平伏して、こんご逆らうようなことはしないと帰属を誓い、命乞いをする。以後、諏訪に住みつき、のちに諏訪大社の祭神

- 7 として祀られることになる。
たとえば、『アポロドーロス ギリシア神話』、高津春繁訳、岩波文庫、には、通りがかった旅人にレスリングを申し入れ、殺してしまう話が出てくる。この他にも同じような話が登場する。つまり、「レスリングをしよう」という物言いは「決闘をしよう」というのと同義であると考えてよさそうである。
- 8 エジプトのカイロから三〇〇キロほど南下したところにベニハサンの墳墓（前二一三三ころ～一七八六年）がある。この墳墓の内側にはたくさんのレスリングの組み手・投げ技などの壁画が残されていることでよく知られている。中国にも墳墓の内側の壁面にすもうをとっている壁画が残されている。日本の『古事記』に登場する野見宿禰も、葬送儀礼に携わる一族であったといわれている。
- 9 ジョルジュ・バタイユ著、中山元訳『呪われた部分 有用性の限界』、ちくま学芸文庫、二〇〇三年、マルセル・モース著、吉田禎吾／江川純一訳『贈与論』、ちくま学芸文庫、二〇〇九年、ほか。
- 10 ひとくちに「フランスの現代思想の系譜に連なる人びと」と言っても、それぞれの立場によって受け止め方が違うだろう。わたしの思考に大きなインパクトを与えた思想家としては以下の人たちがいる。すなわち、ジョルジュ・バタイユ、エマニュエル・レヴィナス、モーリス・ブランショ、マルグリッド・デュラス、ジャック・デリダ、ピエール・ルジャンドル、など。西谷修著『離脱と移動』、せりか書房、一九九七年。西谷修著『夜の鼓動にふれる―戦争論講義』、東京大学出版会、一九九五年、ほか。
- 11 道元著『正法眼蔵』（読解本多数のため省略）、『中村元選集』全四〇巻、春秋社、第一巻（一九八八年）～別巻四（一九九九年）、ほか多数。
- 12 天地自然との折り合いのつけ方を知るには修験道関連の著書が参考になる。たとえば、宮家準著『山岳修験への招待―霊山と修行体験―』、新人物往来社、二〇一一年、ほか。
- 13 クロード・レヴィ＝ストロース著『野生の思考』（大橋保夫訳、一九七六年）、『神話論理』全四巻（早水洋太郎、渡辺公三、吉田禎吾、真島一郎、ほか訳、二〇〇六年～二〇一〇年）、以上、みずす書房、ほか。
- 14 西田幾多郎著『善の研究』、岩波文庫、『西田幾多郎哲学論集』（全三巻、上田閑照編、岩波文庫、一九八七年～八九年）、『西田幾多郎全集（全二四巻）』、岩波書店、二〇〇二年～二〇〇九年、ほか。
- 15 福永光司訳注『老子 莊子』、筑摩書房（世界古典文学全集一七）、二〇〇四年、金谷治訳著『老子 無知無欲のすすめ』、講談社学術文庫、一九九七年、小川環樹訳注『老子』、中央公論社、二〇〇五年、ほか。類書、多数あり。
- 16 ジョルジュ・バタイユ著、湯浅博雄訳『宗教の理論』、ちくま学芸文庫、二〇〇二年。
- 17 古代オリンピアの祭典競技は「裸体」で行われていたという。なにゆえに「裸体」だったのかという点についての定義はまだない。競技の起源が「供犠」にあったとすれば、「裸体競技」にこだわった理由がみえてくる。つまり、古代オリンピアの祭典競技が人間性から動物性へ回帰するための儀礼であったとすれば、より動物性に近い「裸体」が選択されたとする推測が可能となる。
- 18 寒川恒夫・監修『二一世紀の伝統スポーツ』、大修館書店、一九九五年。
- 19 シモース・ヴェューユ著、富原眞弓訳、『根をもつこと』上・下、岩波文庫、二〇一〇年。